

陳舜臣さんを語る会通信

NO.60

Feb. 2022

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2022年2月15日

エッセイ集『録外録』と小説集『わが集外集』

本号では、1、2、3頁で『録外録』、4頁で『わが集外集』を取り上げます。

『録外録』は、先ず、昭和58年1月5日～6月30日、朝日新聞の夕刊に連載されました。その第1回(1月5日夕刊)の紙面を下に画像で添付しています。雰囲気を感じ取って下さい。また、その題名について、同著を引用しながらみていきます。

(編集委員 橋雄三)

『録外録』「題名について」

傍線は編集委員の加筆

『録外録』の冒頭、「題名について」で、『録外録』について説明するとき、陳舜臣さんは、好きな題名として、宋の晁補之の『鶏肋集』をあげ、先ず、「鶏肋」の意味を説明しています。「鶏肋」についての『録外録』の記述は、詳しくありますが、ここでは、同じく陳舜臣さんの著作『弥縫録』に記述されている「鶏肋」の文章を転載します。

おなじみ三国志の時代、ときは建安二十四年(二一九)三月、曹操は劉備と漢中で戦った。曹操軍の前線は陽平に達した。劉備は要害の地に拠って防ぎ、曹操は苦戦し、進むことができない。五月になって、曹操はあきらめて軍をひいて長安に帰った。損害が多かったのである。このとき曹操は、

「ここは鶏肋じゃ」と言ったのである。それがなんのことであるか、誰にもわからなかった



朝日文庫表紙
題字は陳舜臣さん

が、主簿(書記)の楊修だけは、さっさと帰り支度をはじめた。僚友にそのわけをきかれた彼は、

「鶏のアバラは食べるほどの肉はついていないが、さりとて棄てるのも惜しい。ダシをとることもできる。けれども、そのためにどんなことをしてでも欲しいというものではない。漢中の土地が鶏肋だというのは、これ以上の戦死者を出してまで奪いたい土地ではないということにちがいない。だからもうひきあげにきまつているよ」と、絵解きをした。はたして、曹操の意は後退だったのである。

そのあと、魯迅の『集外集』に及び、自身の『録外録』について、次のように述べています。

『録外録』から引用します。

私たち小説家は、作品を書くために、いろんなことを調べる。調べたことをぜんぶ書くわけではない。作品のなかに使うか使わないかは、それが鶏肉であるか鶏肋であるかによってきめるのではない。作品のなかにうまくはめ込むことができるかどうか、おもな基準なのだ。私自身にとって、たいそう興味深いものであっても、作品の筋からはなれている場合は、それを割愛せざるをえない。

私が作品のなかに「録」した「外」のものは、その作品との関係度が薄い、か、まったくなかったかであって、そ

れ自体が肉のすくないアバラとはかぎらず、私もいつか別の機会に「録」しておきたいと思うものが多かった。そうになると、『録外録』というタイトルは、まさにうってつけといわねばならない。さらにいえば、この題名なら、なにを書いてもかまわないだろうという気やすさもうまれて、すこぶる都合がよろしい。

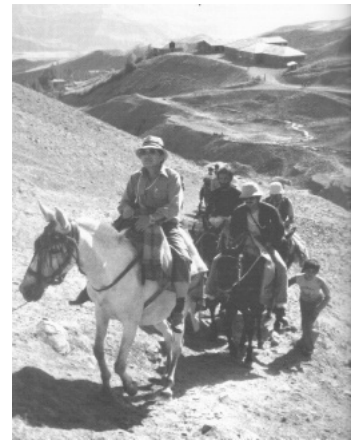


『録外録』 内容紹介(1)

各編の題	内 容
題名について	本号前ページ参照
がんもん 雁門の人	元の時代の色目人(しきもくじん)、薩都刺(さつとら)をえがく。この人は、『中国詩人伝』でもとりあげられている。魯迅の『臘葉』にも言及
南海の船	フビライは実弟の孫の妃として、コカチン姫をえらび、イル汗国へ送ることにした。このミッションの一員に任命されたマルコ・ポーロとその船団について。続いて、明の鄭和の南海大航海について。 ■『小説マルコ・ポーロ』
イル汗国	コカチン姫一行がイル汗国に着いたとき、夫となるべきアルグーン汗はすでに死に、弟のガイハトゥーが汗位に就いていた。コカチン姫はアルグーン汗の息子ガーザーンに嫁ぐ。この時期のイル汗国をえがく ■『チングス・ハーン一族』
集史の人	やがて即位したガーザーン汗は、希代の名宰相ラシード・ウッディーンにモンゴルの歴史を書きとめることを命じた。この著は『集史』と呼ばれる
鷲の巢城	まず、イスラム教スンニー派とシーア派について説きおこし、あと、アラムート(鷲の巢城)の政権についての記述が続く。また、陳舜臣『桃源郷』にも、「アラムートの客」という章がある。 ■ニザーム・アル・ムルク 郭侃(かくかん)
一衣帯水	日中朝関係で、遣唐使及び卑弥呼の魏への使者について記述し、次に豊臣秀吉の朝鮮出兵並びに日清戦争を取り上げる。 ■『江は流れず』
長いひげ	「ウルツ・サハル(長いひげ)」、チングス汗は耶律楚材をそう呼んだ。耶律楚材は陳舜臣さん思い入れの人物。■『耶律楚材』
カラ・キタイ	カラ・キタイ(西遼)は、遼滅亡の際、耶律大石が中央アジアに建てた国
溶ける	イル汗国はイランで消滅し、モンゴル人はこの地に溶けた。そして、ときどき蒙古斑をもつ子が生まれる。とはいえ、その子はモンゴル人ではない。りっぱなイラン人でイランの文化をうけた人である。“溶ける”をそんなふうに使っている。元寇を例にとって詳述
英雄のあと	アヘン戦争後の林則徐。陳舜臣『中国近代の群像』に「それからの林則徐」がある



薩都刺(さつとら) 画：李庚
講談社文庫『中国詩人伝』より



アラムート山に登る陳さん
『陳舜臣中国ライブラリー26』

界人と意識していたかもし

「集史の人」より。
コカチン姫の一行が二年あまりかけてイル汗国に着いたとき、すでに、夫となるべきアルグーン汗は病死していた。コカチン姫は、アルグーンの子・ガーザーンに嫁ぐ。コカチン姫は十九歳であつたので、ガーザーンは、四十をこえたアルグーンよりふさわしい相手だったかもしれない。ガーザーンはのち、汗位に就く。
陳舜臣さんは、ガーザーン汗とその宰相・ラシード・ウッディーンを、名君と名宰相として高く評価する。ガーザーン汗はイスラムに改宗し、イスラムの服装や風習を採用し、その反対者を仮借なく弾圧したが、同時に彼は、この名宰相であり、碩学でもあるラシードに、モンゴルの歴史を書きとめることを命じた。モンゴルを囲む世界の歴史も含めて記述されたこの著は、『集史』と呼ばれる。

ガーザーン汗と宰相ラシードを絶讃 傍線は編集委員

れない。服装や風習などは、とるに足りないものであることを、壮大な歴史で教えるようという意図があつたとも考えられる。

モンゴル族よ、世界になれ、だが、そのためにはモンゴルのことを知れ、世界との関連によってそれを知れ。ガーザーン汗が身内の者に、そうさとしていた場面が、わたしには想像できる。(朝日文庫 p.67-68)

ラシードは、おそらく司馬遷クラスの大家であるとおもう。彼にそれを書かせたガーザーン汗も偉大であつたとおもわざるをえない。モンゴルの風習から、イランのそれへ乗り移りつつあつたときに、それを書くことを命じたのである。これはただごととおもえない。(p.72-73)

ラシードには、ユダヤ人説があつたりするが…。

ラシードに、おまえは何人であるかと問えば、世界人であると答えそうな気がする。(p.78)

『録外録』 内容紹介(2)

各編の題	内 容
睡眠雑話	林則徐は安眠を誇り、曾國藩は不眠どころか安眠まで禁じていた、から始まり、珊瑚の枕、水晶枕、竹枕、陶枕など枕談義までの睡眠雑話
夢の話	先ず「邯鄲の夢」。これは陳舜臣『ものがたり唐代伝奇』に「枕中記」という題で収録されている。あと、『莊子』の「胡蝶の夢」、黄帝の「華胥の夢」、あと「槐安の夢」などまだまだ続く。「槐安の夢」も『ものがたり唐代伝奇』に「南柯太守伝」という題で収録されている
予言のこと	人間にわからないことは、神にたずねるしかない。選ばれた人が神のこぼえを伝え、一般にそれは予言といわれる。台湾の「司公(サイコン)」、邪馬台国の卑弥呼、殷王朝の甲骨文、諸葛孔明の七星壇、イスラムの占星術、中国歴史における天文暦数の政治利用などなど。■図識(としん)の書
桃李章	隋末に、「桃李章」という民謡がはやった。これが李氏の天下を予言することばと解された。次は福建地方に伝わった名剣物語『桃李剣叙』、続いて、李の実を売って大金を儲けた西晋の大臣・王戎の話など。あと、桃の霊力について
金山寺	唐の武宗の宗教弾圧以降、消えていたキリスト教が元の時代、復活する。ネストリウス派の教会堂が鎮江の仏寺、金山寺にでき、30年ほどして、それがまた廃止されて仏寺に収められる経緯が詳述される。これとは別に、金山寺絡みで、白蛇の妖精が人間の妻になる話も
宗教出没	中世ヨーロッパで、アジア又はアフリカに、プレスター・ジョンなるキリスト教君主が存在すると信じられていた。この伝説に根拠ありげなことがわかると、ローマ教皇やフランス国王は、プラノ・カルピニ、ウィリアム・ルブルックらの修道士を使節として東方に送った。続けて、元・明・清朝の宗教政策、キリスト教側の布教方策にふれ、また、インドのムガル朝の宗教政策にも言及
教化始末	非漢族皇帝支配下の清朝では、キリスト教にとって布教のチャンスであったはずである。それなのに、清朝による禁教という最悪の事態を招いたのは、おもにキリスト教側に問題があった。■祖先崇拜 孔子崇拜 典札問題
ばんぼう 蕃坊	唐、宋の時代、広州、泉州にあった外国人居留地。また、番坊的なものとして、広東十三行街、中国の「租界」、日本の「居留地」に言及

曾國藩はアヘン吸飲者？

「睡眠雑話」に関連して。



曾國藩は

反省マニアだ。彼ほどたくさんの座右の銘や自戒のことばをつくった人もめずらしいといわれるが、日記を読むと頷ける。曾國藩は膨大な日記を残している。一八三九年、二十九歳の年に始まり、七十二年二月三日、六十二歳の死の前日まで、一日も欠かさず記している。

『曾文正公手書日記』によると、曾國藩は、壬寅の年十一月十六日に三戒の誓を立てている。三十二歳の時である。一戒喫煙、二戒妄言、三戒房闌不敬の三つである。戒妄言は、内容の乏しい軽薄なおしゃべりを慎むという。戒房闌不敬は、セックスの過剰を戒めるもので、特に、日中閨房に入るの禁である。「辛抱できず、昼間からセックスをした。まさに禽獣だ」と自らを責めている。

私が最も関心をもつのは戒喫煙である。喫煙とは、煙草を吸うことではない。アヘンの吸飲である。

曾國藩生家 湖南省湘鄉



時に國藩二十八歳である。上にあげた日記は三十二歳の時だから、希望に満ちて翰林院へ入った少壮気鋭の國藩がどうして四年の間にアヘン吸飲者になってしまったのか。というより、当時、それが、みんなやっていること、普通だったのかもしれない。

ところで、壬寅の年という、道光帝の二十二年、アヘン戦争の講和条約である南京条約が結ばれた一八四二年である。「一年の後、なおアヘンを吸飲するものあれば死刑に処す」という超過激派の林則徐が欽差大臣に起用され、アヘン問題解決のため広州に向けて北京を発ったのは一八三八年の暮れである。

林則徐を採用した道光帝もやる気十分で、まず身近なところから「俺はやる気なんだ」という姿勢を示した。皇族や宗室のなかで、アヘンを吸っている連中を槍玉にあげた。爵位称号を取り上げたり罰したりした。そんな年に曾國藩は進士に及第し、見習官吏として翰林院に入ったのだ。

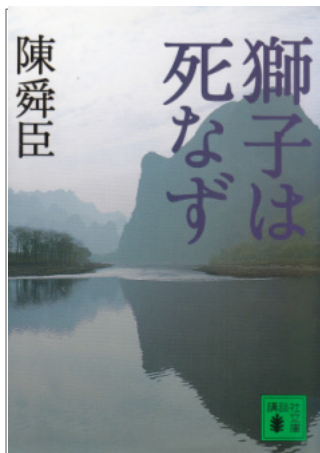
『わが集外集』(文庫版では『獅子は死なず』と改題) 紹介

「わが集外集―あとがきに代えて」に、収録9作が網羅されていますので、重ねての紹介は省略いたします。特に興味深いのは、陳舜臣さんの作家デビューの年、1961年の作品、『狂生員』『厨房夢』『回想死』が収録されていることです。

次にあげるのは文庫版に添えられている加藤徹氏の解説の冒頭です。洒落た文章です。

短編集はカクテルに似ている。それぞれ生い立ち

の異なる作品を一冊の本にまとめるエディターシップは、芳醇な銘酒を一杯のグラスに混ぜるのと同じである。絶妙なカクテルは、それぞれの銘酒がかくしもつ味わいをいっそう引き出してくれる。本書に収める九つの短編は、どれも陳先生の思い入れのある作品であり、いわばカウンターの隅で寝かせてあったとおきの銘酒である。本書は、上質のカクテルに仕上がっている。



講談社文庫表紙

「わが集外集―あとがきに代えて」より転載 傍線は編集委員の加筆

魯迅に『集外集』と題した著作がある。彼の作品は新聞、雑誌に発表すると、待ちかねたように集められて出版される。だが、なかにはそれに漏れたものがあり、そうしたものを集めたものが『集外集』であった。

本書は私の『集外集』である。

ここで最も新しいのは、一九九四年五月号の「小説現代」に発表した『梅福伝』で、じつはこの年の八月に私は脳内出血でたおれた。しかも五ヶ月の入院生活のあと、退院四日目に阪神淡路大震災に遭った。そのあとはすでに約束していた新聞小説二本と、連載小説の残りに集中せざるをえなくなってしまった。短編小説を書くゆとりはなかったのである。だから前年に発表した『六如居士譚』とこの『梅福伝』は、作品集に漏れたのではなく、はじめからこの時代の作品集は編まれていなかったのだ。

『ある白昼夢』と『七盤亭炎上』は、どちらも「オール讀物」に掲載したも

のだが、作者はすでに単行本に収録されているとばかり思っていた。だから完全に漏れた作品であったといえる。

『狂生員』『厨房夢』『回想死』の三作は、いずれも一九六一年、すなわち昭和三十六年に発表したものだ。私が『枯草の根』で江戸川乱歩賞をいただいた年の作品である。すでに四十年たっている。こんな古い作品を出す

のはいかげなものかとも思うが、私はいが子にひとしい作品が差別を受けているのが、はじめから気になっていた。このころ、私は短編小説の題に三字の漢字を用いることが多く、ひそかに作品集の目次にずらりと三字がならぶことをたのしみにしていた。だが、新人なので収録作品を自分でえらぶことはできず、第一作品集に私の三字題がえらばれたのは、『方壺園』『大南堂』『獣心図』『九雷溪』の四作だけであつた。ただこの第一作品集は、『方壺園』と題され、ほかに『アルバムより』

『梨の花』が収録されていた。いま前記三作がここに四十年ぶりに収録され、私は初心忘るべからず、と自省することしきりである。

『西安四日記』は、一九七二年の旅行記で、厳密には小説ではないが、西安事変のことは私もいつか小説に書かねばならないと思っている。また激変しつつある中国について、七〇年代の面影をいささか提供するのも無意味ではないと考えた。

私は隣人たちが知っている物語は、

できるだけ私たちも知っておきたいと思う。その意味で私たちが三国志や水滸伝の物語を知っていることは貴重な財産だと信じている。できるなら私たちの知っている日本の物語を、中国やアジアの人たちにも知ってほしいと願ってやまない。一九七一年九月号「小説現代」に発表した『獅子は死なず』はインドではよく知られた物語である。

それも神話や古代史ものではなく、現代史もので、日本が大いに関係する話なのだ。主人公はチャンドラ・ポースで、台湾で事故死したあと、インドでは長いあいだ生きていると信じられた。

チャンドラ・ポースのインド脱出記は、インドでは空前のベストセラーとなり、だれでも知っている物語となったのである。それだけこの話がインドの人たちの琴線にふれるものがあつたからであらう。せつかく日本とも縁があつたから、私もインドのひとたちとこの物語を共有したいと思う。

二〇〇二年四月十五日 陳舜臣



チャンドラ・ポースの碑
(杉並区 蓮光寺)